川高同窓会報

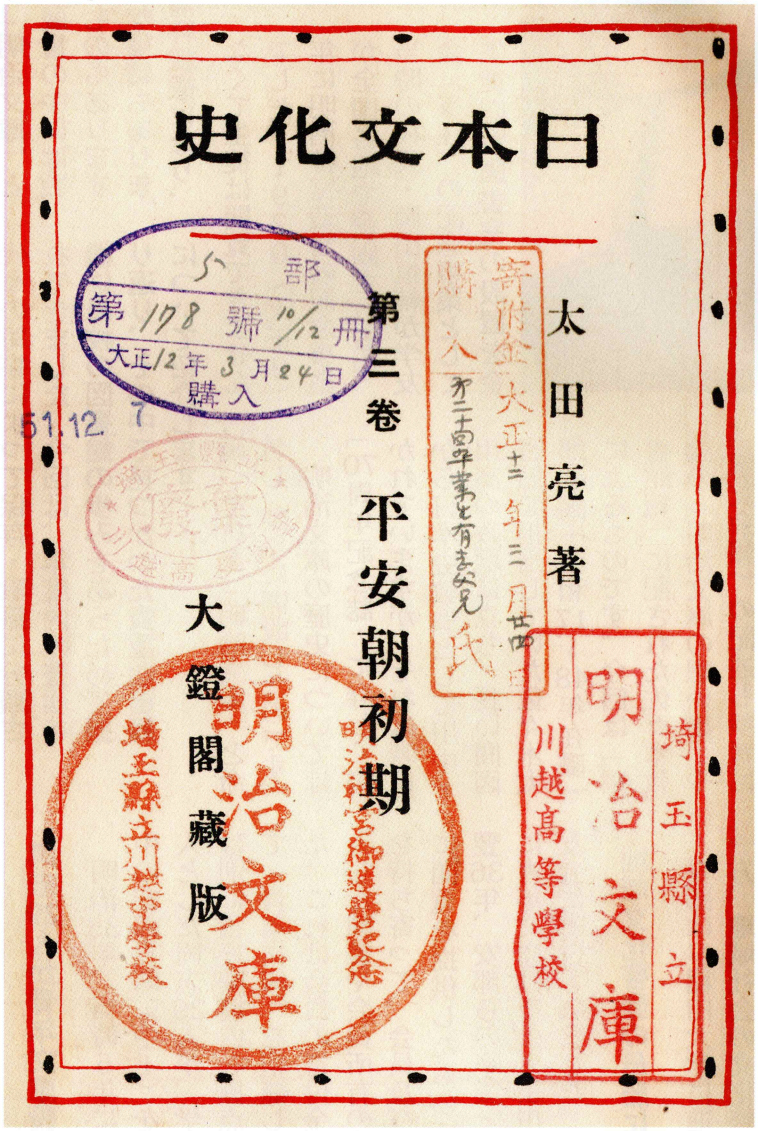
埼玉県立川越高等学校同窓会
〒350-0053　川越市郭町2-6　川越高校内
【同窓会】電話・FAX（049）225-9071　（HP）http://alumni.gnk.cc/kawagoe/
【学校】電話　（049）222-0224　（HP）http://www.kawagoe-h.spec.ed.jp/

特集1

「母校の蔵書を探る」
～明治文庫を中心に～

特集2

コロナ越え同窓会にも春
「くすのき交流会」が発足



「明治文庫」の中には内表紙に丸印と角印が残る蔵書も（本号裏表紙に詳細）

目次

特集1「母校の蔵書を探る」～明治文庫を中心に～……2～5
特集2コロナ越え同窓会にも春「くすのき交流会」が発足……6～9
新旧会長の挨拶……10
新旧校長の挨拶……11
「くすのき未来塾」開催、開校時の教職員写真について12～13
「川高初雁の森」植樹料納入者……14
総会記念講演　堺正一氏……15
文化講演会　笠原慧氏……16
「くすの木俳句大会」のご案内、「くすの木囲碁クラブ」の活動……17
令和4年度終身会費納入者……18
令和4年度事業報告・会計収支、令和5年度事業計画・予算案……19
「コロナ禍での高校生活は」（寄稿）……20
人事異動……21
川高サイエンス探究事業……22
合格状況・部活動等……23
叙勲・褒章等受章者、秋季散策会のご案内など……23
総会・記念講演のご案内
講師　和田雄二氏（高25）
表紙の写真説明・編集後記など……24

特集1

母校の蔵書を探る
～明治文庫を中心に～

その昔、母校の図書館は「明治文庫」と呼ばれて始まりました。蔵書の中には戦後の混乱の中で失われたものもありますが、開校以来の大変貴重な書籍もあります。ただ書庫はしばしば満杯状態になり、代々の司書によって保存・除籍に分類されてきました。今回は、年度内の整理を機に母校の図書館の歩みをあらためて振り返り、その中で見つかった貴重な書籍について紹介します。



図書室誕生の歴史たどる

1899（明治32）年に埼玉県第三中学校として開校した時、さまざまな書籍が購入されました。しかしそれは教員の研修用で、まだ図書室もなくて生徒は閲覧できませんでした。1920（大正9）年に明治神宮造営の記念事業が全国各地で企画される中、当時の校長・岡田恒輔が学友会（※注）の記念事業として生徒閲覧図書室の設置を企画。それを「明治文庫」と命名し、翌年に開設したのです。

明治文庫の歴史については「70周年記念誌」に詳しく書かれていますが、それは戦前から日本史教員として川中・川高の教壇に立ち、長い間図書館を担当していた佐々木太郎教諭（昭和17～48年在職）によるものです。今回は「図書館報」に記された佐々木教諭の「明治文庫の想い出」や「学友会報」の記述も参考にし、明治文庫が創設される以前の歴史からたどります。

※**学友会**　教員・生徒を会員、校長を会長として会員の体力・教養の向上を図り、さまざまな学校行事も行いました。

同志29人が青年文庫設立

明治35年、当時5年に在学中の安部立郎（中1）を発起人とした同志29人が、学校とは別に養寿院境内を拠点として「青年文庫」を組織しました。これは会員の寄付金で購入した図書や会員所有の図書を持ち寄って、会員及び一般に閲覧を提供したものです。翌36年、安部らの卒業とともに青年文庫はそのまま川中学友会に寄付されました。

地域文化啓発の母胎に

安部は早稲田大学に進学る一方、地域社会の文化啓発の母胎を育てるべく、川越中学校を中核として「同志会」を結成し、同39年に養寿院境内にあった川越慈善学校の校舎の一部を借用して、青年文庫を「同志会図書館」と改称して復活させました。

一方、川越尋常高等小学校（現・川越第一小学校）内には町立川越高等女学校があり、そこで英語の教べんをとっていた岩澤新平（中1）と、小学校の菅野政五郎校長が校内に図書館設立を構想していました。岩澤は栃木県佐野高女教諭に異動になりましたが、図書館構想は川中・早稲田大学で同期だった安部に託され、1913（大正2）年、小学校内に私立川越図書館が開設されました。安部は同志会図書館の蔵書を私立川越図書館に吸収させ、同図書館はやがて町立に移管されて市立図書館となったのです。安部は町立図書館の理事長となり、後に岩澤は市立図書館館長に就任しました。

初期の青年文庫が寄贈された以外は、同志会図書館・私立川越図書館とも直接母校とつながりはありませんが、その人脈から考えると母校図書館の先駆的な位置づけをなすと言えます。母校に独自の図書室としての明治文庫を開設した校長の岡田恒輔は、安部・岩澤らと同期の川中1回生なのです。



蔵書整理のため、「明治文庫」など古い書籍に一つずつ目を通す山野清二郎・埼大名誉教授（高12・写真左）と主任司書の大橋瑞穂さん＝川高図書館の書庫で

父兄らの寄付で明治文庫

1920（大正9）年12月24日、岡田校長は明治文庫の設置にあたり、寄付や図書の寄贈を募る趣意書を父兄（保護者）あてに配布しました。

冬休み中に約300冊の図書が集まり、翌年の1月18日、博物教室の一画を借用して明治文庫は始まったのです。その後、卒業生や町民からの寄付金や寄贈図書も集まり、結局99人の寄贈者から624冊の図書が贈られ、192円の寄付金で新たに書籍も購入しました。閲覧室は同12年5月に、博物教室から化学実験室に移され、閲覧時間は午後2時から3時50分までした。

明治文庫への寄付金はその後も続き、特に卒業生及びその父兄からの寄付金で多くの書籍が購入されました。その一部を紹介すると、「世界大戦の教訓と現代思潮批判」「米国と世界大戦」といった時代を反映したもののほか、「世界における自然の奇観」「西洋歴史物語」「代数学叢書」「通俗講義天文学」「植物の構造と生殖」「現代思潮批判」などの一般的教養書、「増訂四書講義」「増訂十八史略講義」といった、漢籍の和刻本もあります。

同窓会が1千円寄付

また、2年をまたいだ卒業生父兄の寄付金で「オックスフォード英語辞典」が購入されました。このころの明治文庫の予算額は190円前後でしたが、同14年の開校25周年にあたって、同窓会から学友会に明治文庫基金として1千円（当時の公務員初任給の約2年分）の定期預金が贈られました。当時の利率は6分6厘。利子66円68銭ほどが毎年明治文庫の資金にあてられ、同15年の明治文庫予算額は250円になりました。利息で「日本文学大系」を購入したり、在校中逝去した生徒の父親からご子息の在校記念として寄贈された箸であり、少し前に校長室で私ども幾人かの柔道選手に〝柔道助手を命ず〟の辞令を下さったとき、あの温顔に微笑をたたえ、特に声を励まして「柔道善用！　いいかね……」とだけ一言おっしゃった先生故に、私は縮みあがった上に更にきょとんとしてしまった――。

※打木村治　大正6年入学の中20回生。大阪生まれだが比企郡唐子村（現・東松山市）に移り、川中在学時代のことを小説『大地の園』で描いた。ここの話は打木氏が5年生の大正10年と思われる。

打木村治氏の明治文庫の想い出（抄録）

（『創立七十周年記念誌』所収「一片の思い出」より）

――明治神宮ができたその記念事業ということで、初代の明治文庫世話役の先生は、英語の山田先生であった。先生は若く熱心で、毎朝朝礼のとき、文庫を活用せよと激励なされた――「明治文庫を借りたい！という人は…」という情熱的な表現は、当時私たちの間で人気を呼んだ。――私たちにも、その素朴なニュアンスから滴った真のユーモアというものが理解できたのだ。で、私の畏友武藤市郎君なんか、よし明治文庫をまるごと借り出してやる、などといって私たちを笑わせたものだ。爾来暫く先生の綽(あだ)名は「健脳丸」から「明治文庫」にとって変った。

明治文庫は二階の会議室めいた部屋がそれに当てられていた。狭いがしんとした部屋であった。こんにちはその面影の片鱗もあろう筈（はず）はないが、その頃はその部屋には、いま流行の言葉でいえば、明治がそっくりそこにあった、といえるような細長い部屋であった。山田先生は職員室にいるよりよっぽどこの部屋にいたほうがいい、といったお顔で、いつもそこでカードなんかいじくりまわしておられた。私は柔道とマラソンの選手で放課後はだめだったが、気まぐれに昼休みに明治文庫を訪れることもあった。あるときひょいとドアをあけると、ほかに誰もいないその部屋に、時の校長岡田恒輔先生が本棚の前にぽつんと立っておられた。私は縮みあがった。しかし先生はおっしゃった。「きみ、本を読むことはいいことだね。さあ、読み給え、わたしは外に出るから」。けっして、なーんだきみも本を読むのか、といったお顔はなさらなかった。私を腕白者の一人と印象

して「万有科学大系」全6冊が寄贈されもしました。

雑誌も購入し、「考へ方」「野球界」「武蔵野」「少年倶楽部」「受験と学生」「体育と競技」「一年の英語」「三年の英語」「上級英語」などでしたが、昭和初期には「キング」と「戦友」も加わりました。いずれも時代が反映されています。生徒だけでなく教職員の利用もしばしば見受けられるようになりましたが、化学実験室は暖房器具もなく冬は寒いので、文庫担当の生徒は「自宅閲覧者は多いが、室内閲覧者は暁の星のごとく少ない。遠からず『明治文庫』の建物ができることを夢見る」と「学友会報」に記しています。

寄宿舎に閲覧用図書室

1939（昭和14）年6月には、真の生徒図書室とすべく旧寄宿舎の2階に移し、入口には「明治文庫」の標札が掛けられました。そのころ既に日中戦争の渦中にあり、国民精神総動員運動の中で教育は超国家主義思想に引きずられていました。同16年には日米開戦を迎え、当時の明治文庫にも陸海軍諸学校の受験案内書や「日米若し戦はば」「日米開戦論」等々、国防・戦争意識を高揚するものが少なくありませんでした。

戦局が悪化して学徒勤労動員が始まると、生徒の登校は週1～2回程度となりましたが、軍関係諸学校や上級学校進学を目指す生徒のために、必要な参考書50～60冊程度が文庫から選び出され、動員先の生徒控室に置かれていました。やがて軍隊が本校校舎に駐とんするに及んで、職員研究室の図書も一緒になって一室が本で埋まり、身動きがままならぬ状態で終戦を迎えたのです。

戦争が終結して明治文庫を見ると、中はかなり荒れていたようです。戦時中の物資欠乏は紙類もその例外にもれず、駐とんの兵士が明治文庫の蔵書の一部を抜き取って用便の落し紙に使っていたとか。無残な話ですが、佐々木教諭が確かな筋から聞いたそうです。

戦後の明治文庫と図書館完成

敗戦後、県当局が軍国主義的なものや、民主主義に背反する書籍の廃棄を要求してきたり、GHQ県軍政部からも具体的に書名を羅列したリストが送られてきました。明治文庫には陸海軍諸学校関係書も少なくなく、正課であったが授業停止になった柔剣道書・修身・地理・日本歴史の生徒用参考書・地図・皇室中心の書籍など、約1千冊が廃棄されました。「今から思えば神経過敏に過ぎて、不必要な処理をした感がある」と佐々木教諭は記しています。

一方で、現在も「教育勅語渙発関係資料」というものが残っています。

明治文庫は戦後北校舎の2階にあった旧忠霊室（大正元年の陸軍特別大演習にあたり

母校図書館書庫 所蔵書籍の一例

分類	書籍名	編著者	出版年
1	可南列女伝（8冊）	北村季吟	1655
2	円機活法（24巻20冊）	明　王世貞校訂	1656
2	五車韻瑞（152巻、25冊）	明　凌稚隆撰	1657
2	文選六臣注（30冊）	蕭統	1662
2	古文真寶（10巻5冊）	宋　黄堅	1665
2	三国志（15冊）	晋　陳寿	1670
3	杜詩詳註（24冊）	仇兆鰲　輯註	1693
1	去来湖東問答	向井去来	1699
1	無名抄（上、下）	鴨長明	1750
1	通俗忠義水滸伝（80冊）	岡島冠山訳	1757
1	諸国奇談	橘南谿	1795
3	李太白文集（20冊）	王琦（おうき）	1795
1	尾張廼家苞（5巻9冊）	石原正明	1819
1	古史徴（4巻10冊）	平田篤胤	1819
1	神楽催馬楽入綾（6冊）	橘守部	1842
3	増補事類賦統編（6帙45冊）	増補：黄葆真	1846
1	歴世女装考（4冊）	山東京山	1848
2	謝選拾遺（7巻4冊）	頼山陽撰	1849
3	説文解字注	後漢 許真撰	1872
3	帯経堂詩話（21巻12冊）	王士禛	1873
3	御選唐宋詩醇	高宗	1882
3	佩文韻府（62冊）	康熙帝撰	1897
3	王文成公全書（24冊）	王守仁（王陽明）	1900
3	大清一統志（60冊424巻）		1902
4	A Midsummer Night's Dream	Shakespeare	1895
4	Paradise lost	John Milton	1897
4	Self-Help	Samuel Smiles	
4	Fairy Tales and Stories	H.C.Andersen	
4	The Outline Of History	H. G. Wells	1920
4	The Writings Of Lafcadio Hearn	Lafcadio Hearn	1923
4	Kenilworth	Sir Walter Scott	1926
5	皇室の制度典礼	植木直一郎	1914
5	船舶史考	新村出	1927
5	ギリシア史研究	原随園	1928
5	古代研究　民俗学篇	折口信夫	1930
5	対馬民謡集	宗武志	1934
5	民族性と神話	松村武雄	1934
5	日本盲人史	中山太郎	1937
5	冬の華	中谷宇吉郎	1938
5	民謡覚書　創元選書	柳田国男	1940
5	武家時代と禅僧	辻善之助	1941
5	極地集誌	加納一郎	1941
5	支那中世仏教の展開	山崎宏	1942
5	論語と孔子の思想	津田左右吉	1946
5	刑法史の断面	滝川幸辰	1948
5	南方熊楠全集	渋沢敬三	1951
5	日本無罪論　真理の裁き	パール述	1952
5	終戦史録	外務省編	1952

分類1：古典籍和書
分類2：古典籍和刻漢籍
分類3：漢籍
分類4：洋書
分類5：近代書籍

□は開校当時の書籍　□は明治文庫

※表は、詳細記録から抜粋した一例です。

大正天皇が宿泊した部屋で、その後大戦で戦没した同窓生をまつっていました）に移り、狭い部屋でしたが１９５１（昭和26）年10月の校舎改築工事着工まで、そこで図書室活動が行われました。

同28年2月の竣工以後は本館2階の一室に陣取りました。戦後学校制度の変革で学友会は生徒だけの生徒会に変り、図書を置いた施設は公式には「図書室」と表記されましたが、図書室の入口には「明治文庫」の標札が再び掛けられました。同28年8月、学校図書館法が制定されて学校図書館の設置が義務付けられ、本校でもようやく同32年11月に建設工事が着工され、翌年3月にブロック積みの建物が完成。ここに独立した新図書館ができ、明治文庫から１万２千８９０冊が引き継がれたのです。

川高に移行し丸印から角印へ

明治文庫の所蔵を示す印鑑は戦前の川越中学校時代は丸型でしたが、戦後の川越高校発足に伴って四角型に変わりました。四角型の明治文庫所蔵印は新図書館ができても昭和37年ごろまでは慣例的に使われ、それ以降は「県立川越高等学校図書印」になっています。現在の図書館の総蔵書数は約6万冊です。

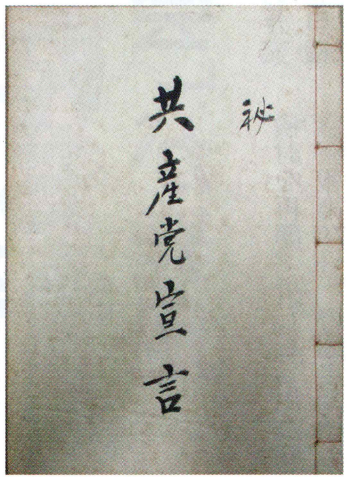
受け継がれる希少・貴重本

明治文庫に先立って母校に備えられた書籍については、国語科の髙野好美教諭（現在は飯能高校勤務）が研究を進め、「埼玉県第三尋常中学校の書籍から見えてくるもの」（２０１１年　川越高校「紀要」第44集）としてまとめられました。調査の対象としたのは「埼玉県第三中学校図書之印」の朱印を持つ和装本で、和本１１６部（漢籍和刻本を含む）、漢籍13部、近代資料2部です。

和本は歴史・文学・和刻本の漢籍が中心で、「日本書紀」「近世畸人傳」「大日本史」「校刻日本外史」「三国志」「康熙字典」「清朝史略」「玉勝間」「紫式部日記注釈」などがあります。この中で「康熙字典」そのものは清の康熙帝の命による辞書で、その翻刻版が１７９０（安永9）年に出版されたもの。「校刻日本外史」は川越藩校博喩堂の教授に取り立てられた安岡嶺南（元吉）が、１８４４（天保15）年に藩主松平斉典の命を受けて頼山陽の「日本外史」に校刻を加えたもので、「川越版日本外史」とも呼ばれました。各藩の藩校が競って所蔵したこともあり、全22冊は14版を重ねました。維新後も版木を松平氏が保管し、母校所蔵本は斉典の4代後の直方によって、１８７６（明治9）年に刊行されたものです。

漢籍では「李太白文集」（乾隆帝期末期に出版された李白の詩文集注釈書）、「唐宋詩醇」（乾隆帝が自ら編纂した、唐の杜甫、李白、白居易や宋の陸游など6人の詩の選集。光緒帝の時代に出版されたもの）などがあります。

近代資料の「埼玉縣水害誌」は、死者３２４人を出した１９１０（明治43）年の大水害の報告書で、埼玉県域の水害状況を図示した「洪水汎濫之図」は、現在のハザードマップに匹敵します。



母校の図書館に残る共産党宣言の写本

戦前の手書き共産党宣言も

髙野教諭が取り上げたもう一つの近代資料「秘　共産党宣言」は謎の蔵書です。口語訳の手書きによる写本で、本校の所蔵印はありません。戦前はもちろん学校で購入できるはずもなく、戦後もＧＨＱから廃棄命令が出ています。しかも「秘」と記されたものがなぜ本校にあるのか。そもそも「共産党宣言」の日本語訳は１９２１年以降ですが、１９３０年代、学生への左翼思想の浸透を警戒した政府は国民精神文化研究所を設立。「左翼思想とはどういうものか」中等学校教員などを対象とした思想問題講習会を開いていました。その資料として内務省が作成した「共産党宣言」が使われました。

図書館所蔵の写本はその時の資料本となった「共産党宣言」と全く同一文言なので、資料本を筆写したものと考えられます。誰が筆写したかは分かりませんが、かつて川中校長だった岡田恒輔が国民精神文化研究所の設立期に文部省思想局調査課長の職にあり、この講習会と密接な関係を持っていたことから、職務上岡田が所持していたものが戦後本校図書館にもたらされたのではないかと、高野教諭は推定しています。いずれにせよ写本が現存しているのは稀で、とても貴重な資料です。

髙野教諭が調査したのは、川越中学所蔵印のある和書・漢籍の一部ですが、漢籍を読むための書籍が全体蔵書の6割に達するそうです。洋書もありますが、それは明治期の中等教育の基盤と教養教育の在り方（外国語と国語漢文を均等割り当て）の表れだと思われます。

これらの書籍群については、歴代の司書によって修理がなされ、貴重なものは現在まで受け継がれています。

特集2

コロナ越え同窓会にも春
「くすのき交流会」が発足

新型コロナウイルスの感染症法上の分類が、季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に。同窓会活動の再開・活性化が期待できるようになりました。川高同窓会では、世代を超えた同窓生間のより一層の出会いや交流を図るための新規事業「くすのき交流会」を発足。更なる活性化・発展を目指します。また、行動自粛が日常生活の基本となったコロナ禍での同窓会活動の経過から再開への動きまでをまとめました。

世代超えたネットワーク

新たな交流の場を発足

同窓生が卒業同期のクラス会や学年同窓会、卒業後の部活動先輩・後輩の交流などでよく話題にするのは、川高での思い出や「今どこに住んで、何しているの」などの事柄。そこで、川高同窓会では同窓生間のさらに新しい出会いの場を提供するため、新規事業「くすのき交流会」を発足させることになりました。



「くすのき交流会」は母校のくすのきが仲介する繋がりを新機軸に据え、川高での思い出や「今どこに住み、何しているのか」を話題に、世代を超えた交流や新たなネットワークづくりを応援するのが目的。「同窓会活動の活性化を図る上で、このような取り組みが不可欠」との見解は、同窓会活動の中核を担ってきた役員間で、コロナ禍以前から指摘されていました。

同窓会では2019（令和元）年、母校創立120周年を機に「同窓会奨学財団」を設立し、同時期から地域貢献事業「くすのき未来塾」を開始。その直後、コロナ禍で新規事業立ち上げの取り組みはひとまず休止に。この間に事務局長が交代し、懸案事項は継承されました。2022（令和4）年になると、ウィズコロナが模索され行動制限が大幅に緩和され始め、秋ごろより事務局内で新規事業企画の検討を再開。折しも「川高同窓会報第79号」の編集開始の時期と重なり、新規事業関連記事と新事業への参加募集掲載が可能に。この機を逸すると新規事業開始が1年遅れとなるため、急きょ「くすのき交流会」企画運営委員会本部を立ち上げ、細部の検討が始まりました。

先輩・後輩の枠を超えて

「川高同窓会報」を送付している同窓生（住所判明者）2万2千936人の年齢別内訳は、65歳以上38・8％（全日制34％、定時制81・2％）、64歳以下61・2％（全日制66％、定時制18・8％）。現在、同窓会活動の主な担い手は、時間的余裕などさまざまな理由から65歳以上の同窓生が中心。対して、世代を超えた同窓生間の新たなネットワークづくりを目指す「くすのき交流会」は、一般的に仕事や子育てが生活の中心である64歳以下の同窓生に有意義なものとなるように企画。仕事等で時間的余裕のない同窓生の母校への思いに対し、この会に母校校長を招へいすることにより、現役後輩の活動について最新情報を提供していただく予定です。

一般的な名刺交換会や異業種交流会は、情報交換や人脈づくり・ビジネスパートナー探しなどが目的。対して今回の「くすのき交流会」は、国の内外の幅広い分野で活躍中の同窓生や経験豊富な同窓生が一堂に会し、先輩・後輩の枠を超え、母校くすのきのもとで過ごしたころの話題を基に、質の高い異業種交流などを通して多様な情報交換を行うとともに、今後の夢を語り合うなどしながら、同窓生間のより一層のネットワークづくりを目指すことが目的です。この出会いから、仕事上の既知同士が同窓生であることが判明したり、異業種の同窓生間で互いに興味ある話題を提供し合ったり、交流のない同窓生を紹介し合うなど、新たに広がるネットワークづ



発足準備の初会議に出席した（右から）金子保夫氏、望月勝氏、加島篤人氏、髙橋篤氏、新井義幸氏、野口孝氏＝昨年12月4日、川高体育館研修室で

窓生がこの会への参加を契機に地区初雁会・さらには同窓会活動全般への関心を深めて行くことが望まれます。

そのため、企画運営委員会（本部）では充実した会となることを目指し、応募はがきへの記載事項から、当日運営（会場設営・進行・飲食内容・交流方法など）、事後評価方法まで入念に検討を重ね、細心の注意を払い準備に取り組んでいます。第1回「くすのき交流会」は、同窓会長をはじめ、梶田隆章（ノーベル物理学賞受賞）東京大学卓越教授（高29）もお呼びし、2023（令和5）年12月16日（土）に開催します。多くの皆さんに参加を呼び掛けています。

働く世代に参加しやすく

発足の趣旨から、時間的余裕のない多くの若い同窓生の皆さんにも積極的に参加していただけるように、東京の中心部で、土曜日の午後に、気軽に集えるように企画を工夫。第1回以降も有意義な会として定着させ、参加した同くりが可能に。

地区初雁会も活動再開

コロナ禍の同窓会活動

2020（令和2）年春の第1波では4月に初の緊急事態宣言が。「同窓会報第76号」誌上で案内した5月の同窓会総会は急きょ中止せざるを得ず、同年7月に臨時役員会を招集。総会の代替として令和2年度の事業計画・予算案を承認しましたが、事業計画のほとんどはやむなく中止しました。

一方、各地区初雁会では志木初雁会のように定期総会や事業を休止する旨を通知する地区、狭山初雁会など予定していた総会での原案に基づいて役員会の責任で運営する旨を通知する地区、在京初雁会など定期総会の書面開催を通知し実施する地区などがありました。しかし、総会以外の諸事業計画はほとんど中止を余儀なくされ、同窓会活動全般の停滞が懸念され始めました。

第3波の中で迎えた2021（令和3）年。「同窓会報第77号」誌上では総会後の懇親会はあらかじめ中止する旨を案内。5月に総会と記念講演会のみ、三密回避や換気に十分留意し実施。引き続く第5波・年度末に襲った第6波の中では、前年度同様、事業計画はほとんど中止を余儀なくされました。そうした中にあって、企業や学校でテレワークやオンラインの導入が急速に浸透。同窓会地域貢献事業の一つである「くすのき未来塾」でも2回オンラインで開催し、当初計画していた年度内3回の開催を予定通り実施しました。

一方、2021（令和3）年度、各地区初雁会では前年度に増して、書面での定期総会が開催されるようになってきました。所沢初雁会などいくつかの地区初雁会が発出した書面には、対面での総会中止の無念さとともに再開への期待と会員相互の健康祈念についての共通した記載が見えます。そうした中、各地区初

くすのき交流会 発足の目的

国の内外の幅広い分野で活躍中の同窓生や経験豊富な同窓生が一堂に会し、先輩・後輩の枠を超え、母校くすのきのもとで過ごしたころの話題を基に、質の高い異業種交流などを通して多様な情報交換を行うとともに、今後の夢を語り合うなどしながら、同窓生間のより一層のネットワークづくりを目指す。

第1回「くすのき交流会」ご案内

日時：2023年12月16日（土）
15：00～17：00
受付開始　14：00

場所：MYプラザホール
（東京都千代田区丸の内2-1-1）
（東京駅より徒歩5分）
☎03-5219-5602

参加人数：180人
（参加希望者多数の場合は先着順）

参加費：8,000円

企画運営委員会 本部：
加島篤人（同窓会常任幹事　高34）
髙橋 篤（高37）
望月 勝（高41）
新井義幸（高42）
金子保夫（事務局長　高25）
野口 孝（事務局次長　高25）

委員：
在京・各地区初雁会より就任（20人）



雁会の中では感染防止に十分配慮しつつ、当初計画していた事業に取り組み始めてきたところもありました。川越初雁会では2022（令和4）年3月下旬、恒例のゴルフコンペ（第20回）を実施。プレー後の懇親会なしの計画でしたが37人が参加し、久しぶりに会員相互の情報交換を行いました。

ウィズコロナへの対応

2022年度は第6波の中で始まり、感染拡大は予断を許さない状況下でしたが、ワクチン接種率の上昇とコロナ禍での経済活動を回復させるとの目的から、ウィズコロナが模索され始めました。4月下旬発行の「同窓会報第78号」作成時では、総会後の懇親会実施はまだ無理と判断し、その旨を掲載。例年どおりに5月最終日曜日に総会と記念講演会のみ実施。その後、「川高初雁の森」植樹祭と「秋季散策会」は、2019（令和元）年以来3年ぶりに復活実施することができました。



「川高初雁の森」植樹祭

9月25日（日）の第9回植樹祭では、恒例の応援部による演技で、校歌と応援歌が3年ぶりに「川高初雁の森」に響き渡りました。今回は根岸秋男・同窓会長ら同窓生32人と長谷川仁校長のほか在校生35人が参加し、ハイキング道の整備を中心に間ばつ・下刈作業なども行いました。頂いた植樹料で、名栗湖畔より入口に向かうハイキング道脇にある看板も新しくできました。



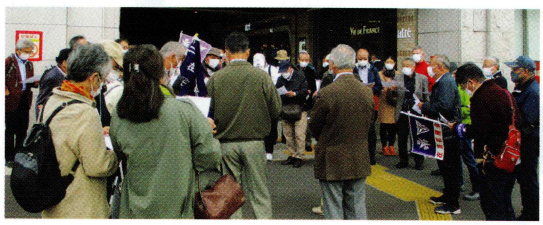
ハイキング道にウッドブロックを敷設する作業では、同窓生と在校生を交えて10班を編成。飯能市農林部森林づくり推進課の指導の下、それぞれの班が密を避け、やや離れた個所で作業（**写真左上**）。作業終了後は、名栗湖畔の東屋などで久しぶりに語らいながら弁当を食べました。

秋季散策会

11月5日（土）には秋季散策会を3年ぶりに開催。秋季散策会は、平成5年度より各地区初雁会のいずれかが主催することに変更。変更後27回目となる今回は、在京初雁会が9年ぶりに6度目の担当。

9月中旬に横溝高至・在京初雁会会長と大舘廣同会事務局長が、同窓会事務局で開催の可否について最終の打ち合わせ。根岸秋男・同窓会長の意向も踏まえ、感染対策に十分配慮しながら実施を決定。

当日は50人を超える参加者（同窓生とその同伴者）が、語らいながら晩秋の明治神宮外苑での散策を楽しみました。午後は電車で新宿に移動し、マスクを身近に用意しての懇親会も開かれました。



地区初雁会でも活動再開へ

2022（令和4）年度は第6、7、8波と続き、感染の波は収まりを見せていませんでしたが、感染対策が広がるにつれ行動の制限は大幅に緩和。各地区初雁会の総会開催は前年度より大幅に増え、21地区初雁会のうち11地区で実施されました。内訳は書面での総会が2地区、対面での総会（多くで講演会も開催）が4地区、対面での総会後懇親会実施が4地区、対面での総会時とは別に講演会・新年会実施が1地区ありました。

特に、越生初雁会では総会後の講演会を地域に公開。会員以外の住民18人も参加してのオープンな催しとなりました（**写真左**）。

それぞれ対応にはまだ差はありますが、総会開催や総会以外の諸事業など、各地区初雁会でも活動再開の動きが出てきています（紹介した地区初雁会の活動は、事務局で把握できたもののみ）。

次頁に、会長の交代があった地区初雁会を紹介します。



越生初雁会の講演会では地域の人も参加

地区初雁会の新会長挨拶



在京初雁会
横溝高至
（高21）

長年、在京初雁会の会長としてご尽力された西信之氏が逝去され、後任として会長を仰せつかりました。西前会長にあらためて深く感謝申し上げますとともに、慎んで哀悼の意を表します。

在京初雁会は昭和28年3月に創立され、70年にわたり活発に意義のある活動を続けています。初代の矢部謙次郎会長（中1）から数え私は10代目の会長になります。創立当初から「昼食会」を中心に活動していましたが、その後「夕べの集い」が加わり、現在は総会、春と秋の例会（散策会）、母校同窓会の行事・事業への参加・協力、会報「鐘つき堂」の発行等の事業を続けています。「鐘つき堂」は昭和48年に創刊、104号まで発行してきています。

在京初雁会は、先輩・後輩という縦の糸、同学年同士の横の糸、相互の絆を深める貴重な会だと思います。同時に、他の初雁会の皆様と連携をとりながら、母校川越高校・川越高校同窓会とも緊密な関係を維持し、少しでも母校の発展に寄与できる存在であり続ける必要があるということも忘れてはならないのではないかと思います。

在京初雁会の会員をさらに増強し、その活動を発展させるべく、微力ではありますが尽力したいと思います。皆様のご指導ご鞭撻（べんたつ）のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



入間初雁会
岩田力也
（高11）

令和4年6月、コロナ禍で3年ぶりに開催された入間初雁会総会で、逝去された前会長原田雅義氏（中45・46）の後任に推挙されました。年齢順というお話に躊躇（ちゅうちょ）しましたが、原田先生が生前よく言われた「人生は加齢とともに老いるのではなく、理想を失った時に老いる」という言葉を思い浮かべ、お受けすることとしました。

本会は、創立40周年を目前にしています。この永き良き伝統を継続することが私の役目だと考えています。皆様のご支援をお願いいたします。

高校時代の部活動は野球部と陸上競技部で、今もOB会等でお世話になっています。私が高校3年のとき、「世紀のご成婚」と大ブームを起こした当時の皇太子明仁親王と正田美智子様の婚約発表がありました。クラスでは授業前、お祝いの手締めを行い喜びにわいていたのですが、先生の笑顔でのお叱りで校庭1周。懐かしい思い出です。卒業後のクラス会「禎遊会（小川禎三先生と遊ぶ会）」を結成。現在も楽しく続いています。

私はこれらの繋がりも大切に、これからも母校への応援ができたらと思っています。



川島桶川初雁会
冨田三千彦
（高20）

コロナ禍の中、3年ぶりに対面での総会が開催された昨年7月、第6代会長を仰せつかりました。古希を過ぎ、体力・知力・気力も衰えてきたと自覚していたことや、責任の重大さに大いに悩みましたが、菊池建太顧問・岡部政一前会長をはじめ、役員・会員の皆様のご指導・ご協力を頼りに、この大役をお引き受けしました。今は体力・気力の維持向上を目指し、朝・夕のウオーキング・野菜作り・ゴルフなど静かな頑張りを続けています。

当会は平成9年11月に会員27人で発足し、現在の会員数は53人です。これまで年間行事として6月の総会・講演会・懇親会と12月の施設見学・懇親会の実施と、年1回会報を発行していました。これらの活動は、同窓会ならではの世代を超えた方々との出会いや交流を図る良い機会となっていましたが、この3年は中止せざるを得ない状況でした。

今後は諸行事の復活や新会員の加入促進などに取り組み、会の活性化に向け努力していきたいと思っています。また、昨年NHKで放映された「鎌倉殿の13人」を契機に開かれた比企地区初雁会での情報交換会を、より有意義な会にできたらと考えています。



川越初雁会
金子憲二
（高13）

令和4年9月17日、川越初雁会の定期総会にて岩堀弘明前会長から引き継ぎ、会長に推挙を受けました。何とぞよろしくお願い致します。

新型コロナの影響が続き、会合ができづらくなって3年近く。川越初雁会としての意義は人と人の交流の場であり、同年代のつながりも大事ですが、年代を超えて親しくなれる会でもあります。

仲間を大切にし感謝の気持ちを持ちつつ、情報交換の場として広報誌を毎年2回発行。総会・講演会、春秋の散策会、ゴルフ会など、各種親睦会を通して交流も深まり、役員の方々のお力添えを頂き楽しくなってきたと思います。

就任間もない会長ですが、同窓会会員諸兄のご指導をよろしくお願い申し上げます。

退任挨拶



旧・同窓会会長
菊池建太（高17）

退任にあたって

２０１６年５月22日、梶田隆章先生のノーベル物理学賞受賞記念碑除幕式と記念講演が行われ、中庭と体育館に多数の同窓生が参加されました。その後、恒例の同窓会総会において故・田中正会長の後任として会長をお引き受けいたしました。

私の役目は校長経験を生かし１２０周年記念事業を成功させることでした。１００周年事業と違い、短期間で準備することになりました。２０１９年11月１日、晴天に恵まれ、ウエスタ川越大ホールは招待者・同窓生・保護者・在校生で埋め尽くされました。式典は簡素ながら重厚。最後の校歌斉唱は、全校生徒の歌声が大ホールに響きわたりました。記念講演は梶田先生に依頼。ニュートリノ発見に至る話から日本の基礎研究の課題、さらにこれからの若い高校生に向けての内容で、参加者に感動を与えました。休憩をはさんでの生徒の発表は、歴史と伝統を感じさせる素晴らしいものでした。

主な事業は、川越高等学校同窓会奨学財団の設立、ポスター・ロゴマークの制作、１２０周年記念誌の作成、川越高校の本の出版、川越市内小学生対象のくすのき未来塾の設立、記念事業の冠を付けた各種部活動の発表会など多くの事業が実施されました。翌年からコロナの感染状況が急拡大しましたので、その前に諸事業が実施できたのは幸運でした。

コロナ禍の３年間は支部の行事が中止になりましたが、昨年度は本部の総会、「川高初雁の森」の植樹祭、国立競技場周辺の秋の散策会は実施できました。同窓生のご寄付で運営している「川高初雁の森」づくりは、２０２１年３月に「彩の国環境大賞優秀賞」を受賞しました。今後も埼玉県・飯能市・同窓会３者の「森林（もり）づくり」が継続し、在校生・同窓生の交流がさらに図られることを期待しています。

記念事業が終え、会長３期で交代したいと思い、諸先輩と相談。次期会長候補についてご意見を頂き、明治安田生命保険相互会社の根岸秋男会長（高29）から快諾を得られました。その後、正副会長会議・役員会を通して、２０２２年５月29日の総会でバトンタッチ。民間で活躍し視野の広い新会長の下で、新たな同窓会の発展が期待されます。人生１００年時代における多くの人との交流・学び、さらに母校の教育活動の支援が図られることと思います。

新会長挨拶



新・同窓会長
根岸秋男（高29）

就任にあたって

令和４年５月の同窓会総会にて菊池建太会長の後任として、第21代会長に就任して以来、約１年が経ちました。

菊池前会長におかれましては、１２０周年記念事業や子どもたちの学ぶ力を育てる「くすのき未来塾」など、教育支援の充実・同窓会活動を通じた地域貢献にご尽力いただきました。心から感謝と御礼を申し上げます。

私にとって川高は、互いに刺激を与え合う知己との出会い、リスクを恐れず挑戦することの大切さを学んだ大切な場です。このたび、同窓会長として会員の皆様と共に在校生・母校・地域に貢献できる機会を得たことを大変うれしく思っております。諸先輩から引き継いだ同窓会事業の継承・発展に努めるとともに、ビジネスの世界での知見・経験を活かし、世代や分野を超えた川高らしいネットワークづくりにも取り組んでいきたいと考えています。

コロナ禍で中止を余儀なくされていた同窓会事業も、昨年９月には「川高初雁の森」の植樹祭、11月には３年ぶりに在京初雁会主催の「秋季散策会」を開催しました。

植樹祭では、同窓生と在校生が共に汗を流して交流を深めることができました。また、秋季散策会では、同窓会員に加え、同伴者とも懇親の場を得て対面での活動の大切さを実感しました。

コロナ禍で対面の活動が難しい中、会報は会員の絆であり、前会長時代からその充実に取り組んできました。本号の特集「母校の蔵書を探る」では「明治文庫」創設に始まり、貴重な蔵書の蓄積に尽力された教員・先輩方の歴史を知ることができます。

さらに、同窓会活動を発展させるため、新規事業として「くすのき交流会」をスタートします。国内外の幅広い分野で活躍中の同窓生や経験豊富な同窓生に多数ご参加いただけるよう、12月の初開催に向けた準備を進めています。先輩・後輩の枠を超えて、母校くすのきの下で過ごしたころの話題を基に多様な情報交換等を行なう、皆様にとって有意義な交流の場にしたいと考えています。

今年度は各地区初雁会を中心とする活動や、「同窓会奨学財団」「くすのき未来塾」等の教育支援に加え、新たに「くすのき交流会」を展開することで、より一層、同窓生・在校生への価値提供、母校・地域の発展に尽くしたいと存じます。

退任挨拶



校長　長谷川仁

令和4年度を振り返って

3月9日、第75回卒業証書授与式が挙行されました。75回生は、緊急事態宣言直後に入試が実施され、許可候補者のみによる入学式・入学式後は2カ月の休校・自宅学習と、コロナ禍直撃の学年でした。さまざまな制限の中での川高生活でしたが、「自主・自立」の校風の下、「学びを止めない」を大前提に勉強も部活動も学校行事も真摯に取り組んでくれました。

過日、国公立大学の入学試験発表が行われ、東大4人をはじめ旧帝大・一橋大・東工大・国公立大医学部の現役合格者数は、過去最多の昨年度に迫る39人を数えています。

コロナ禍でありながらも、今年度はほぼすべての学校行事を以前に近い形で実施しました。くすのき祭は規制の中ではありましたが、来校者は9千人を超え、3年ぶりの一般公開も県内最大規模で実施できました。また、4年ぶりの奥武蔵での強歩大会・有観客での陸上競技大会の実施。コロナ禍を、学校全体で乗り越えた感があります。

部活動でも、弓道部・陸上競技部・庭球部がインターハイ出場。新聞部・美術部が「全国高等学校総合文化祭」に出場。地学部は「地学オリンピック全国大会」で銅賞。物理部は「ロボコン全国大会」で準優勝するなど、文武にわたり結果を残した年でもありました。

これまでの歴史と伝統を大切にしつつ、時代に合った学習環境を整備し、川高生の高い志の実現をサポートしていくことが今の川高に携わる私たち教職員の使命と考えます。

現在の生徒にも、伝統は確実に引き継がれています。凌雲の志を持ち、より高みを目指し、日々努力し続ける。誰にでもできる事ではありませんが、大きな可能性を持った川高生には、妥協することなく、さまざまな分野で日本一を目指してほしいと考えます。

令和3年4月1日に本校赴任以来、はや2年の月日が経ちました。本校の輝かしい歴史と伝統、文武にわたる実績、さらにグローバル社会におけるリーダーとしての人材育成というミッションを追究すべく、全力で走ってきたつもりです。この2年間、菊池元会長、根岸現会長をはじめ会員の皆様には、一方ならぬご協力・ご支援を頂戴し、心から感謝申し上げます。

新校長挨拶



新校長
小出和重

就任にあたって

4月1日付で着任しました小出和重と申します。県内有数の歴史と伝統を誇る県立川越高等学校にお世話になることに、身の引き締まる思いでおります。本校の良き伝統を引き継ぎ、さらなる発展を遂げられるよう微力ながら努めてまいります。

さて、今の社会を形容するものとして「VUCAの時代」という言葉がございます。「VUCA」とは、Volatility（不安定さ）、Uncertainty（不確定さ）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（あいまい性）の頭文字をとったもので、変化が激しく将来の予測が困難で、先行き不透明な時代のことです。この言葉が使われ始めたころは、高度情報化やAIの進展に見られる技術革新、地球温暖化などによる地球規模の環境問題などが象徴的なものでした。

そして近年、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起こり、「VUCAの時代」だと、改めて思い知らされました。そのため学校教育は生徒一人一人に、「VUCAの時代」を生き抜く「力」を身に付けていくものでなければならないと考えています。つまり、マニュアルを読んで正確に、そして素早く再現する「力」だけでなく、主体的に課題を発見し、未知の課題を協調的に解決するために果敢にチャレンジする「力」を育成することが今の教育には求められています。

本校では「新たな時代に向けて、伝統ある進学校としての期待に応えつつ、自主自立の校風を継承・発展させ、リーダーとなる良識ある人材を育成する」ことを「目指す学校像」とし、新しい学びのスタイルを創造してまいります。

「新しい学び」とは、例えば、アクティブ・ラーニングとICT活用を融合した授業や教科横断型・文理融合型の授業など、教師が一方的に教える授業から生徒が学ぶ授業へと転換し、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業スタイルのことです。知識・技能だけではなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう姿勢など、現在の大学入試でも問われる力を育成するものです。また、普段の授業だけでなく、同窓会の皆様にもご支援いただいています「グローバルリーダーシッププログラム」や「川高サイエンス探究」などの取組を通じて今求められる力を育み、学び続ける人材の育成にしっかりと取り組んでまいります。

同窓会の皆様には、本校教育の推進に引き続きご理解を賜り、お力添えを頂きますようお願い申し上げ、着任の挨拶とさせていただきます。

「くすのき未来塾」を3回開催

令和4年度もコロナは収まりませんでしたが、その中でオンライン開催を含めて3回開催。特に第3回は対面とオンラインを同時に行うハイブリッド形式。今後の未来塾の展開に大きな飛躍をもたらす契機になりました。

第1回　8月27日
「なぜなぜ？　川越『市』、誕生ものがたり～川越の産業とそれを支えた交通の発達と教育の様子にもふれながら～」
松尾鉄城（高18）
川越市文化財保護審議会副会長

コロナ感染第7波のために、ZOOMウエビナーを使ったオンラインで開催。受講予定者には事前に質問を寄せてもらい、それを講義の中に反映してもらいました。講義はまず、事前質問のあった川越藩や川越城の話から始まり、近代に入って織物業を中心とした川越の産業発展、支えた舟運や鉄道、そして小学校から中等学校の設立など、県下で最初の市になった川越の発展の様子が、豊富な写真と共に語られました。

当日の参加者は11人でしたが、講義の途中にも多くの質問が寄せられました。最後に子どもたちにもなじみのある「蛍の光」の作詞者・稲垣千穎（ちかい）は川越藩に縁のある人物であることが説明されました。講師自身によるハーモニカ演奏もあったのですが、機材の不具合からか、オンラインでは音が聞こえていなかったのは、かえすがえすも残念なことでした。



ハーモニカで「蛍の光」を演奏する松尾鉄城氏

第2回　12月10日
「ワクワクする未来へ！　主人公は君だ！～サッカーを通して今伝えたいこと～」
片山瑛一（高62）
プロサッカー選手
柏レイソル所属

現役Jリーガーを講師に迎えた異色の講義。コロナ感染もやや下火になったこともあり、川高体育館のアリーナを会場に対面形式で実施。22人の児童と保護者17人が見つめる中、講師がサッカーボールをリフティングしながら登場するという演出。Jリーガーの生活や試合でのプレーなどが画像で紹介され、高校時代は無名選手だった講師がプロサッカー選手になるまでのいくつかの転機について話されました。

実技指導はありませんでしたが、参加児童の中には、サッカーの練習が終わって駆け付けたと思われるような運動着スタイルのサッカー少年・少女も見られ、講義の休憩時間にアリーナの空きスペースで、ロングスローの実演や講師を中心としたパス交換などが行われました。終了後に講師のサイン入りの色紙が配られ、参加児童には貴重な経験と記念になりました。


の合間にロングスローの実演を披露する片山瑛一氏＝川高体育館で



児童を前にした形式とオンライン同時配信という初のハイブリッド方式で講義する笠原慧氏

第3回　3月11日
「宇宙の謎に探査機で迫る」

笠原　慧（高52）

東大大学院理学系研究科地球惑星科学専攻准教授

セミナー室での児童を前にした講義と、それをオンラインでもライブ配信するという、ハイブリッド方式での展開。第2回講座の時にコロナのために学級閉鎖になった児童が参加できなくなり「オンラインでの配信はないのか」と保護者から聞かれたのがきっかけ。募集定員を超えた申込があってもオンラインがあれば全ての児童も参加できる方式として取り入れる事にしました。

参加申込者数は81人。予定した定員を超えましたが、希望者全員に希望通りに受講をしてもらうこととし、結局当日参加者は、会場受講が51人、オンライン受講が14人でした。くすのき未来塾も新しい段階を迎えました。

講義は、宇宙科学のミッションはどういうものがあるのかから始まり、太陽系について形成過程の動画を示しながら、惑星だけでなく小惑星や彗（すい）星などを調べることが太陽系の形成過程の解明に繋がること、そのために日本を含めてたくさんの探査衛星が打ち上げられていること、そして自身が関わったオーロラの解析装置の製作も示されました。

講義内容には専門的なものもありましたが、参加者からの質問もたくさん出ました。その中で「将来は木星や土星の探査もミッションとしてあるが、それは10年後、20年後のことで君たちも間に合う」という講師の言葉が、参加児童の気持ちを奮い立たせていました。傍聴した保護者も、興味深そうに聞き入っていました。



講演

開校時の教職員写真について

2022年9月、開校時教職員の一人・古澤與總（よそう）教諭のひ孫にあたる古澤幹士氏から連絡を頂き、第三中学校開校時の教職員の写真(複製)を送っていただきました。

写真そのものは「百周年記念誌」にも掲載されていましたが、頂いた写真の裏書に「明治32年12月、埼玉縣第三中学校、講堂ニ於テ撮影」と、撮影時期と場所・増野悦興校長以下11人の名前・職掌が分かるように記されていましたので紹介します。後列左から篠原豊州氏（書記）、中島協和氏（嘱託教員）、佐藤惟昇氏（教諭心得）、水野澄治氏（教諭心得）、鈴木庸三氏（助教諭心得）。前列左から市村巖氏（書記）、古澤與總氏（教諭心得）、和田亀之助氏（教頭）、増野悦興氏（校長）、佐藤藤助氏（教諭）、渡部斧人氏（助教諭心得）です。



この写真及び古澤教諭に関する解説は、同窓会ホームページ（HP）に掲載しています。また、初代校長・増野悦興の晩年の日記が滝澤民夫氏（高18）によって近年翻刻され、その紹介と解説の記事もHPに掲載します。いずれも「川中・川高・定時制の歴史」のフォルダにあります。

総会記念講演（概要）　令和4年5月29日

「渋沢栄一と川越の教育・福祉 ～盲教育と児童養護」

元・埼玉県立盲学校（県立特別支援学校 塙保己一学園）校長
元・立正大学社会福祉学部 教授　堺　正一（高14）

障害児教育と児童養護は教育・福祉の原点といわれますが、私が県立盲学校（現・塙保己一学園）の教職にあった者として、また埼玉育児院の役員として見た渋沢栄一について感じたことを話します。

この2施設とも現在川越市内の笠幡にあり、渋沢の支援なしにはその歴史は語れません。「できるだけ多くの人に、できるだけ多くの幸福を与えるのが、私の義務である」を信念とした渋沢は、児玉出身の盲学者・塙保己一の「世のため、後のために」という生きざまに共鳴し、顕彰活動に情熱を傾け、その志を実業界において実践しました。同時に教育・福祉・世界平和・国際交流に力を注いだのです。

私立埼玉盲学校（現・県立塙保己一学園）は明治41年に川越の養寿院境内の廃校になった慈善学校の校舎に誕生しました。盲人の自立を願った鍼灸師の永瀬萬五郎からの盲学校設立の請願に、川越町内の23の仏教寺院が応えたのです。日清・日露戦争で負傷した多くの失明兵士（戦盲）救済（自立）のために、全国で盲学校設立の機運が高まっていたころです。

初代校長は養寿院の住職・石井愚鑑でしたが高齢のため、ほどなく喜多院住職の遠賀（おが）亮中に引き継がれました。当時、埼玉県唯一の盲学校とはいえ公的補助はなく、経営は困難を極めました。厳しい財政下で校長を引き継いだのが喜多町の広済寺住職・笠松仙英です。その半生を盲教育に捧げ、「埼玉の障害児教育の父」と呼ばれています。当時小学生だった長女の方から「経営資金を工面するために、父が風呂敷包みを抱えて学校に鉛筆を売りに来るのが窓から見えるたびに、恥ずかしくて隠れたことがある」と聞いたことがあります。

震災で廃校の危機に支援

そんなさなか、大正12年の関東大震災で古い校舎は大きな被害を受け、廃校の危機に。その時、真っ先に支援の手を差し伸べたのが渋沢栄一でした。自ら寄付をすると同時に、川越町民に盲教育の重要性を説き復興支援を呼び掛け、多くの町民の支援によって廃校は免れました。同時に町民の盲教育への理解がいっそう深まり、支援者も増えていったのです。

同じく市内笠幡にある埼玉育児院（当時の孤児院）ですが、数奇な運命をたどって現在があります。大正元年、菅谷村（現・嵐山町）の安養寺境内に、青年住職・小島乗真は檀家の強い反対を押し切り、私財を投げうって、埼玉初の孤児院を創設しました。小島は天台宗中学校（旧制）在学中に、仏教団が経営する「福田（ふくでん）会育児院」に関心をもち、貧児救済に情熱を燃やしていたのです。しかし、間もなく伝染病が流行り、院児たちの中にも死者が出ると、檀家たちは一斉に住職追放・育児院廃止の声を上げました。やむを得ず、小島夫妻は院児たちを連れて松山町（現東松山市）に引っ越したのですが、そこでも地元民から立ち退きを迫られ、廃院の危機に直面したのです。

その時、支援の手を差し伸べたのが、渋沢栄一の薫陶を受けた笠幡（現・川越市）の豪農・発智庄平です。発智は育児院のために土地を提供し、松山町から現在地に移し、自ら院長となって経営にあたりました。このとき物心両面から発智を支えたのが渋沢栄一で、その支援がなければ現在の塙保己一学園と埼玉育児院は、いずれも存続していないのです。



広く説き少額の寄付募る

渋沢栄一が５００もの企業に関わったことはよく知られていますが、さらに６００以上の社会事業に深く携わったという記録があります。しかし、いかに偉大な人物とはいえ人間わざとは思えません。その謎を川越の事例から探ってみましょう。

渋沢栄一は、実業界で名を上げた他の人物のようには一カ所に多額の寄付をせず、少額の寄付と同時に、広く町民に意義を説き協力を依頼したのです。金額よりも、むしろ「あの渋沢翁」の背中を目にした町民は渋沢を見習い、気軽に分相応の寄付をすることによって、自分の目で見て盲児や盲教育・孤児たちや孤児院の必要性を実感したのです。

21世紀に生きる私たち一人ひとりに課せられているＳＤＧｓの精神は、まさにこの渋沢精神そのものだと私は感じています。その精神は、今日のクラウドファンディングのはしりと言えるでしょう。

文化講演会

太陽系を探査するということ

笠原　慧（高52）
東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻准教授

日時：12月17日13時半～15時半
会場：体育館アリーナ（1・2年）、HR教室（3年）

学問は人の繋がりから成る

学問というのは、数式・論理で組み立てられる機械的なものと思われがちですが、実際の現場（研究の最前線）の感覚でいえば、学問とは人の繋がりでできている、人間味にあふれた営みと言えます。私が関わっている太陽系探査は、多くの人が知恵と力を持ち寄って初めて可能になるもので、特にその傾向が強いです。

かみ砕いてしまえば、辛くて楽しい大人の部活のようなものとも言えます。そこには、個人技とチームワークの両方が求められる、待ったなしの現場があり、笑いあり、涙あり（比喩ではなく）、怒りあり、の人間ドラマが次々に繰り広げられます。

「ジオスペース探査衛星「あらせ」」と観測装置

２０１６年12月、私は鹿児島県・内之浦スペースセンターにいました。そこではＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）のイプシロンロケット2号機が打ち上げられることになっており、そのロケットにはジオスペース探査衛星「あらせ」が搭載されて軌道に投入される予定で、そこには私の観測装置が載っていたからです。

遡って２００４年、私が大学院の修士1年生（23歳）のころ、大変幸運なことに、まだ影も形もない「あらせ」衛星の観測装置の開発を、ゼロから担当するチャンスを得ました。あらせ衛星は、ジオスペース（地球近傍の宇宙空間）で巻き起こるプラズマのダイナミクス、特にプラズマ粒子と電磁波動の相互作用を明らかにすることを目的として計画され、９つもの観測装置を搭載しなければなりませんでしたが、そのうちの２つの機器は技術的な困難から開発が進んでいませんでした。私はここで手を挙げ、早速この２つの観測装置の設計と基礎開発に取り組みました。ビギナーズラック的に良いアイデアが思い浮かんだこともあり、開発の初期段階はとんとん拍子に進みました。ただし、宇宙惑星探査のプロジェクトにかかる時間は長く、大学院在学の5年間では衛星はまだ机上の検討段階の域を出ていませんでしたし、自分の観測装置も原理検証的な基礎実験にとどまっていました。

断固たる決意

宇宙惑星探査プロジェクトというものが、「人の一生分のマンパワーを食い尽くす」ものであるということを、学生時代に見たり聞いたりしていましたので、大学院修了後に民間に出るという選択肢も頭をよぎっていました。ですが、せっかく途中まで形にした自分の観測装置が宇宙に飛び立つところまで見届けたい、そしてその観測装置で取得したデータを世界で一番に解析してみたい、という気持ちが勝り、宇宙惑星科学のコミュニティに残る選択肢を取りました。



そして２０１２年、私が31歳のころ、あらせ衛星がＪＡＸＡの正式なプロジェクトとして認められ、搭載機器開発も本格化することになりました（項羽が中国大陸制覇を掲げて駆け回っていたのが同じ年頃であることを当時認識して、自分もいよいよ宇宙で何かを成し遂げねばならない、と断固たる決意を持ったことが記憶に残っています）。ところが、いざ開発が進むと、必要な作業がはんらんし、次第に収拾がつかなくなっていきました。例えば、一つの観測器を完成させるまでには上述の基礎技術の検証に加え、電気・構造・熱設計、電子回路基板の検証、搭載ソフトウェア開発（プログラミング）、機器組上げ、衛星システムとのインターフェイス調整、耐宇宙環境の試験、製造・試験のスケジュール管理マネジメントなどそこそこに傷んだ実感がありました。

オーロラデータ解析　宇宙の神秘に触れる

それでも２０１５年（34歳のころ）、何とか観測装置を完成させることができました。そして２０１６年の12月にその観測器を載せた「あらせ」衛星が無事に打ち上がり、２０１７年には無事に観測を開始しました。取得したデータの質は素晴らしく、半世紀以上も前から理論的に予想されつつも実証の難しかったオーロラの生成機構を、世界で初めて直接的かつ極めて明瞭に証明する観測データ・解析結果が得られたのです。最初にそれを見た時は、美しい宇宙の神秘に触れた衝撃で体の芯が震えました。

チャンスは突然やってくる

探査プロジェクトが「人の一生分のマンパワーを食い尽くす」という先人の言葉は本当でした。体はそこそこに傷んだ実感がありますが、ただし不思議なことに、一度体験してしまうとやめられない悪魔のような魅力がそこにはあることが分かりました。また、食い尽くされたはずのパワーが後から後からまた湧いてくることも分かりました。今は人生2周目の気分で、２０１９年から彗星探査ミッション Comet Interceptor という欧州・日本の共同計画に関わっています。川越高校の皆さんにもぜひ、自分の人生を惜しみなく注ぎ込める仕事・プロジェクトに出逢ってほしいと思います。そこで何かを達成するためには、個の力を磨いておくことが肝要です。チャンスは皆に回ってきますが、それは突然やってきます。その日に備え、ひたすら自分を磨いてください。

第22回「川高くすの木俳句大会」のご案内

本年も次のとおり開催しますので、母校関係者はもとより幅広い方々が参加されるようお願いします。

日時　8月26日（土）
　　受付　正午より
　　句会　午後1時～5時
会場　川高図書館2階
　　セミナー室
投句　夏・秋　雑詠3句
投句先　350－0053
　　川越市郭町2－6
　　県立川越高校同窓会
投句〆切　8月5日（土）
当日消印有効
会費　投句3句につき1千円
　　郵便小為替にて
　　在校生は無料
選者
　　斉藤弘行氏（高3）
　　東洋大学名誉教授
　　本阿弥英雄氏（高18）
　　「本阿弥書店」顧問
　　勝浦敏幸氏（高21）
　　「爽樹」役員

○第21回俳句大会作品集より

第21回俳句大会は、コロナ禍のため、誌上句会となりましたが、卒業生や母校関係者など述べ24人、在校生は325人が応募しました。

『卒業生の部』

吾目指す百歳句発青嵐
　　村田のぼる（中41）
流蛍の恋はたちまち終るらん
　　斉藤弘行（高3回）
蜩や祈りの八月呼び醒ます
　　吉田白水（高10）
虫干の辞書に栞の箸袋
　　岡部つねを（高15）
冷酒を呑むべし人を愛すべし
　　小林幸二（高17）
蔵街の思い募るや梅雨晴間
　　大嶋文昭（高20）
心太胸の痞へもどこへやら
　　勝浦敏幸（高21）
手をどりの揺らす一夜や夏祭
　　栗原由郎（高21）
夏草や丈低きもの残し抜く
　　一瀬　要（高23）
朝顔や愛が薄いと言はれても
　　市川英一（高23）
高館を隠す夏草衣川
　　石田浩二郎（高24）

『在校生の部』

（天）
イヤホンの隙間を埋る蟬時雨
　　笹原颯太（1・C）
イヤホンを貫く雷雨雨宿り
　　山田春都（1・B）

（人）
うるわしき君の瞳へ花火かな
　　高橋櫂人（1・B）
我が恋は線香花火消えにけり
　　梅原悠里（1・I）

（秀逸）
目と目合い何も聞こえぬセミの声
　　浅岡右羽（1・A）
夏祭二つの影と蒼い鳥
　　青柳心信（1・B）
軒下に手製の風鈴澄みわたる
　　高山真之（1・B）
汗にじむラグビージャージ漢の威
　　大川　悠（1・F）

（入選）
最寄駅汗かく君と会釈する
　　佐野悠斗（1・A）
ため息の孤独に終る打上花火
　　人見悠斗（1・B）
甘酸っぱいそんな気持ちはラムネだけ
　　高橋　晴（1・C）
くすの木のもと恋蛍一つ二つ
　　井口　駿（1・D）
川高と川女切り裂く天の川
　　藤島龍之介（1・G）
手にペン向かうは机我が夏ぞ
　　峯岸孝弥（3・B）
百万燈祭囃子に酔いしれて
　　中村亮太（3・G）

（地）

月例句会のお知らせ

月例句会を「川越吟行句会」と名称を変え、広く参加者を募ります。

奇数月は川越周辺の散策、偶数月はオンライン句会を行います。左記に登録願います。

https://ntgm.nolimbre.com/kawagoe/

詳細は、管理者の市川英一氏（高23）のアドレス

myoujin.11ei@gmail.com

にご連絡下さい。

「くすの木囲碁クラブ」の活動

2022（令和4）年度は役員改正を行い、橋本光男（高18）・会長、山川均（高18）・副会長が就任。定例会（奇数月の最終土曜日開催）は、コロナ禍のため、2023年1月28日と3月25日の2回のみ母校セミナー室で開催しました。また、恒例の研修旅行「伊香保の陣」、4校（浦和・熊谷・春日部・川越）対抗戦は、ともに中止となりました。

12月3日（土）には、昨年度に引き続き大澤麻耶囲碁インストラクターを招き指導碁を実施しました。

定例会とは別に、機会あるごとに「川越igoまち倶楽部」の活動に協力。この倶楽部の代表は関口一郎（高5）・くすの木囲碁クラブ顧問で、囲碁を通して子どもの健全育成や地域づくりなどに取り組んでいる団体。今後も活動の一環として、クラブ会員が「川越igoまち倶楽部」が主催する親子囲碁教室や各種囲碁イベントに積極的に参加し、若い世代への囲碁普及活動に協力することにより、地元の子どもたちの健全育成（地域貢献）に取り組んで行きます。



くすの木囲碁クラブでは会員を募集しています。興味のある方は同窓会事務局までご一報下さい。

令和４年度事業報告（案）

4月22日（金）	「川高同窓會報」（第78号）発行
5月29日（日）	同窓会総会・記念講演会（堺 正一氏）
6月24日（金）	「川高初雁の森」事業部会　下刈作業
8月　下旬	第21回「川高くすの木俳句大会」誌上句会
8月27日（土）	第1回くすのき未来塾（オンライン開催）
9月25日（日）	第9回「川高初雁の森」植樹祭
10月8日（土）	第1回同窓会報編集委員会
10月　中旬	4校（浦和高・熊谷高・春日部高・川越高）同窓会親睦囲碁大会　中止
11月5日（土）	秋季散策会（在京初雁会）国立競技場周辺散策
12月3日（土）	くすの木囲碁クラブ講師招聘指導碁
12月10日（土）	第2回くすのき未来塾（母校体育館アリーナ開催）
1月21日（土）	第2回同窓会報編集委員会
1月28日（土）	くすの木囲碁クラブ例会
3月11日（土）	第3回くすのき未来塾（母校セミナー室・オンライン同時開催）
3月19日（日）	第3回同窓会報編集委員会
3月20日（月）	会計監査
3月25日（土）	くすの木囲碁クラブ例会
3月26日（日）	同窓会役員会

令和５年度事業計画（案）

4月22日（土）	『川高同窓會報』（第７９号）発行
5月28日（日）	同窓会総会・記念講演会（和田 雄二 氏）
6月23日（金）	「川高初雁の森」事業部会　下刈作業
8月26日（土）	第22回「川高くすの木俳句大会」
9月中旬以降	同窓会報編集委員会（～令和６年３月まで）
9月24日（日）	第10回「川高初雁の森」植樹祭
10月29日（日）	秋季散策会（東松山初雁会）岩殿観音（巌殿山正法寺）周辺散策
12月16日（土）	「くすのき交流会」
3月　下旬	会計監査
3月31日（日）	同窓会役員会

＊　各地区初雁会：定例総会、記念講演会、懇親会 等
＊　くすのき未来塾（年度内３回開催）
＊　川越吟行句会（月例句会改め）
　　川越周辺散策かオンライン句会（毎月）
＊　くすの木囲碁クラブ　奇数月最終土曜日
　　４校同窓会親睦囲碁大会

同窓会役員会を開催

同窓会役員会が3月26日午後2時から川高セミナー室で開かれ、30人が出席。根岸秋男会長の挨拶（**写真**）に続き、長谷川仁校長よりコロナ禍で3年間を過ごした今春の卒業生をはじめ、生徒たちの充実した活動成果と自身の退任の挨拶がありました。



議事では令和4年度事業・決算報告と監査結果。その後、同窓生間の世代を超えた出会いや交流を図るための新規事業「くすのき交流会」の発足（6頁参照）について審議。同窓会活動の活性化に向けた取組は、かねてから役員間で指摘されてきており、満場一致で承認。続く令和5年度事業では、12年目を迎えた「川高初雁の森」の入り口改修を予算計上することを承認。議事の最後、同窓会総会後の懇親会（**24頁参照**）については4年ぶりに実施することとしました。

冒頭の根岸会長挨拶時のみ写真撮影依頼のためマスクを外しましたが、それ以降は閉会までの約45分間、参加者はマスクを着用。役員各位の協力で円滑に議事が進行し、つつがなく終了しました。

コロナ禍での高校生活は

新型コロナウイルス感染拡大の波が繰り返す中、川高生の生活が激変して3年。学び舎での高校生活が令和4年度はどの様な影響・変化をたどったのか、現役の生徒の視点・感覚で伝えてもらうため、川高新聞部の堀野遥部長から頂いた寄稿を掲載します。

川越高校新聞

令和4年度は誰もが実感するように、新型コロナウイルスの災禍がだいぶ収まってきたと思います。学級閉鎖は時折見られたものの、感染症対策としてのリモート通信や、くすのき祭のように大規模なものを除き、行事における制限もほとんどなくなってきました。

伝統を新たにゼロから再考

コロナ禍が縮小して「例年通りの生活ができる」といっても、現在の川高生はその「例年通り」を体験したことがありません。それは、今まで継がれてきた川高の伝統を完全には継承できていないことを意味します。

ところで、昨年度は前年に比べて協議員の活動頻度が増えたり、生徒会が目安箱を設置したりしていました。十分に活動できていない状況を変えようとしたときに、「例年通り」を復元するだけでなく、新しくできることをゼロから再考したのだと思います。そう考えると、少し欠けた伝統は新たな道を開発したと言えるかもしれません。

時代に合った環境を作る

伝統といえば、校歌・応援歌指導では、その在り方に声を挙げた1年生がいました。アクションの良し悪しについては必要がないので論じませんが、とにかく、長く存在する伝統に疑念を持ち、変えてみようとすることは基本的に稀有だと思います。

これは感染症の影響というよりは、時代に合った環境をつくることを怠らない川高生の特徴の顕現でしょう。似た動きとしては、くすのき祭の規約改正がありました。

くすのき祭が一般公開

具体的に行事を振り返ると、やはり本校の一大恒例行事であるくすのき祭の一般公開が目立ちます。2日間をそれぞれ午前・午後の部に分け、来場者数を各部2千人に抽選で絞って開催されました（実際は保護者別枠なのでもう少し人数が多い）。校内開催の昨年度と比較し、たいそう盛況となりました。また、2年生の修学旅行は昨年度は例年通りの時期に行われませんでしたが、今年度は計画通りできました。

雪の校庭で戯れる光景も

さて今年2月、雪がグラウンドに積もった日、昼休みに眺めると雪と生徒がグラウンド一面に広がっていました。銀世界の趣が消えゆく光景には少し哀愁を覚えながらも、どこか新鮮でした。今思えば、コロナ禍での日常では生徒が外で遊んでいる風景を目にすることができなかったためなのでしょう。「例年通り」を知らない私には、それが相変わらずなのかどうかさえ知り得ませんが、川高生はやはり活発なのでしょう。少なくともコロナウイルスが日常生活にもたらす束縛は、確実に小さくなっていると実感しました。



令和5年度は、ほとんど規制がなくなると思いますが、川高では何が起きるのでしょうか。

人事異動

◆退職
教諭　國弘　雅也　志木高校
〃　下野　凪渡　小川高校
〃　阿部　宏　村口　将美
〃　長期研修復帰（電気通信大）
◆転出
校長　長谷川　仁　飯島　徹也　川越西高校
〃　木村　和憲　狭山緑陽高校
教頭　市川　京　〃　青木　幹太　狭山緑陽高校
日高特別支援学校校長　〃（再）加藤　武司　所沢北高校（再）
教諭　田上　司朗　〃（再）粟飯原　進　川越南高校
越生高校　〃（再）富田　聡　春日部高校
〃　池田　英人　越生高校　〃（再）徳井　正明　伊奈学園総合高校
〃　本福　陽一　川越女子高校　〃（臨）宮田　卓弥　戸田翔陽高校
〃　紫村　英敬　都立八王子東高校　講師（臨）市谷　史生　川越女子高校
〃　金子　瑞葵　飯能高校　〃　山本　清美　市立浦和南高校（臨）
〃　辻　久典　狭山清陵高校（再）　事務部長　大曽根紀夫　新座高校
〃　田部　美登子　富士見高校（臨）　業務主事（臨）深野　健一　豊岡高校（臨）
〃　斉藤　大峰　朝霞高校（臨）　非常勤講師　青野　博由　所沢西高校
事務部長　大島　秀樹　熊谷女子高校　◆新採用
業務主事　姫島　英樹　川越女子高校（臨）　教諭　杉田　一真　（民間から）
◆任期満了　〃　米澤　宏誠　（民間から）
講師　江里　俊幸　〃　鈴木　秀弥　大宮中央高校（臨）
◆転入
校長　小出　和重　川口北高校
教諭　山下　剛

川越高校サイエンス探究事業

学習企画部　阿部　宏

「川高サイエンス探究事業」は11年間指定されたスーパーサイエンスハイスクール事業の後継事業で、同窓会・後援会のご支援を受け実施しております。

◆令和4年度の成果

全国大会上位！

「ロボカップジュニア・ジャパンオープン2022けいはんな大会」が令和4年4月に行われ、物理部4チームが参加、「埼玉川高物理部2年サッカー」チームが64チーム中8位の成果をあげました。

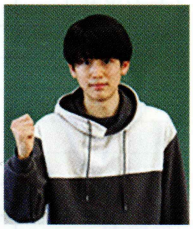


埼玉県大会準優勝！

令和4年11月に行われた「第12回科学の甲子園埼玉県大会」に参加した20校中、本校は筆記の部2位、実技の部2位となり、総合準優勝の成果をあげました。

全国大会銅賞！

「第15回日本地学オリンピック」において、地学部の川角周君が、令和5年3月に行われた本選に挑戦し、銅賞を受賞しました。本選には日本国内の1434人から1次・2次予選を通過した中学生・高校生65人が参加しました。



全国大会準優勝！

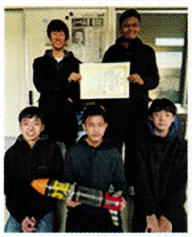
「ロボカップジュニア・ジャパンオープン2023名古屋」大会が令和5年3月に行われました。1年生の災害救助ロボットが、「レスキューメイズ」という難関種目で世界へあと一歩に迫る準優勝。2年生のサッカーチームが68チーム中10位と健闘しました。



全国大会出場決定！

「第47回全国高等学校総合文化祭」

令和5年7月に行われる「2023かごしま総文」で、サイエンス探究Dグループ／物理部のチームが埼玉代表として、「ペットボトルロケットの内圧と高度」の研究を発表します。



◆サイエンス探究事業

1年間の取り組み

○サイエンス探究Ⅰ・Ⅱ

1年生43人、2年生39人、3年生53人が選択しました。

授業「サイエンス探究Ⅰ・Ⅱ」は、総合的な探究の時間の選択科目で、研究能力・発表能力の育成を目標に、知の融合を意図した次の4分野から選びます。

A　地球環境
B　生命と物質
C　環境分析と物質の変化
D　物質とテクノロジー

授業は、①教員による大学レベルの内容も含む高度な講義・実験・実習、②授業と連動した研究者の特別講座、③課題研究と発表、④科学コンテストへの参加、の4つの柱で構成されています。

5月　生徒研究発表会

文系・理系分野59作品の研究を発表しました。

川高サイエンス探究事業のスーパーバイザーを招へい。東京大学卓越教授の梶田隆章・特別栄誉教授、理化学研究所の加賀屋悟氏、武蔵野学院大学の福田直教授にご指導いただきました。

6月・7月

○特別講座

「環境DNA分析による水生生物調査の現状」石黒直哉・城西大学教授（Bグループ）

「なぜ宇宙は今の姿になったのか？」東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構の高田昌広教授（Dグループ）

「高エネルギー加速器研究機構」見学・実習（Dグループ）

「富士山宝永火口巡検」（Aグループ）

「OBレクチャー」

SSH、サイエンス探究で活躍したOB6人が、現在取り組んでいる研究や研究生活について講義。



10月

○科学教育振興展覧会

地学1作品、生物2作品、物理3作品を出品。2次審査に進んだ「ペットボトルロケットの内圧と高度」（サイエンス探究／物理部）が優秀賞を受賞、全国総合文化祭埼玉県代表に推薦されました。「オオヒラタシデムシ Necrophila japonica はどのようにミミズを探すか」「遺伝情報に基づくムサシトミヨの遺伝的位置」（生物部）が2次審査で優良賞を受賞しました。

11月

○全校講演会

「気候の危機と社会の大転換」をテーマに、東京大学未来ビジョン研究センター教授で国立環境研究所地球システム領域上級主席研究員の江守正多氏にご講演いただきました。

○「素粒子と宇宙の謎に挑戦する最先端科学」

東京大学准教授 大谷航先生、教授 山下了先生と大学院生4人により、講演と実験を行っていただきました。（Dグループ）

○「クマムシの生態と日吉台地下壕見学会」

慶應義塾大学医学部の鈴木忠准教授（Bグループ）

12月

○冬休み科学教室

川越高校を会場に実施。参加高校は川女・川越南・川越初雁・川越総合・川高の5校、ブース数は35。小中学生・保護者150組の約300人が参加し、満足度100％の事業となりました。

SSH事業に続き「川高サイエンス探究事業」への同窓会の多大なるご支援に深く御礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

2023年度　大学等入試合格状況一覧

2023年3月31日現在

国立	合格		入学	
	総計	(現役)	総計	(現役)
北海道大	12	(10)	9	(9)
弘前大	1	(1)	1	(1)
岩手大	1	(0)	1	(0)
東北大	16	(11)	16	(11)
茨城大	3	(3)	3	(3)
筑波大	13	(12)	13	(12)
宇都宮大	1	(0)	1	(0)
群馬大	4	(2)	4	(2)
埼玉大	22	(18)	20	(16)
千葉大	7	(5)	7	(5)
東京海洋大	2	(2)	2	(2)
電気通信大	5	(5)	5	(5)
東京大	5	(4)	5	(4)
東京学芸大	3	(3)	3	(3)
東京工業大	7	(2)	7	(2)
東京農工大	12	(10)	12	(10)
一橋大	6	(5)	6	(5)
横浜国立大	12	(9)	8	(6)
新潟大	1	(1)	1	(1)
信州大	2	(2)	2	(2)
静岡大	2	(2)	2	(2)
名古屋工大	1	(0)	1	(0)
京都大	6	(0)	6	(0)
京都工芸繊維大	1	(0)	1	(0)
大阪大	2	(2)	2	(2)
九州大	5	(3)	5	(3)
長崎大	1	(1)	1	(1)
鹿児島大	1	(0)	1	(0)
計	154	(113)	145	(107)

公立	合格		入学	
	総計	(現役)	総計	(現役)
前橋工科大	1	(1)	0	(0)
東京都立大	3	(3)	3	(3)
横浜市立大	1	(1)	1	(1)
都留文科大	1	(1)	0	(0)
山口東京理科大	1	(0)	1	(0)
計	7	(6)	5	(4)

私立	合格		入学	
	総計	(現役)	総計	(現役)
酪農学園大	1	(0)	1	(0)
東北医薬大	1	(0)	0	(0)
獨協医大	1	(0)	1	(0)
城西大	2	(0)	0	(0)
東京国際大	2	(2)	0	(0)
文教大	8	(6)	2	(1)
目白大	1	(0)	1	(0)
千葉工大	3	(1)	0	(0)
青山学院大	14	(13)	3	(2)
桜美林大	1	(1)	0	(0)
学習院大	18	(17)	0	(0)
北里大	11	(11)	2	(2)
慶応大	41	(18)	14	(8)
工学院大	9	(7)	2	(2)
国学院大	4	(4)	0	(0)
国際基督教大	1	(0)	0	(0)
国士舘大	2	(1)	1	(0)
駒澤大	4	(1)	0	(0)
芝浦工大	52	(39)	7	(5)
順天堂大	1	(0)	0	(0)
上智大	13	(8)	1	(1)
昭和薬大	1	(0)	0	(0)
成蹊大	7	(3)	0	(0)
成城大	2	(0)	0	(0)
専修大	9	(8)	1	(1)
大正大	1	(1)	0	(0)
大東文化大	6	(2)	0	(0)
拓殖大	3	(2)	1	(0)
多摩美大	2	(2)	1	(1)
中央大	63	(50)	15	(12)
帝京大	2	(1)	0	(0)
東海大	5	(1)	1	(0)
東京医大	1	(0)	0	(0)
東京工科大	4	(2)	0	(0)
東京電機大	20	(14)	4	(3)
東京農大	15	(14)	3	(3)
東京薬大	2	(2)	0	(0)
東京理大	93	(61)	12	(11)

私立	合格		入学	
	総計	(現役)	総計	(現役)
東邦大	1	(0)	0	(0)
東洋大	44	(37)	6	(5)
二松学舎大	1	(0)	0	(0)
日本大	27	(18)	2	(1)
日本医大	1	(0)	0	(0)
日本獣医生命大	1	(0)	1	(0)
法政大	93	(72)	9	(8)
星薬大	1	(1)	0	(0)
武蔵大	16	(5)	0	(0)
東京都市大	3	(1)	2	(1)
武蔵野大	1	(0)	0	(0)
武蔵野美大	2	(2)	2	(2)
明治大	142	(111)	21	(18)
明治学院大	3	(2)	1	(0)
明治薬大	7	(4)	3	(2)
明星大	3	(3)	0	(0)
立教大	53	(42)	5	(2)
立正大	2	(0)	0	(0)
早稲田大	90	(64)	37	(30)
神奈川大	1	(1)	0	(0)
関東学院大	3	(0)	0	(0)
洗足学園音大	1	(1)	1	(1)
金沢医大	1	(0)	0	(0)
金沢工大	2	(2)	0	(0)
同志社大	3	(3)	0	(0)
立命館大	1	(1)	0	(0)
岡山理大	1	(0)	0	(0)
計	930	(662)	163	(122)

大学校	合格		入学	
	総計	(現役)	総計	(現役)
防衛医科大	1	(0)	0	(0)
防衛大学校	1	(0)	1	(0)
計	2	(0)	1	(0)

部活動の主な活躍（敬称略）

●**陸上競技部**　三段跳関東大会3位、高校総体出場　石田（3年）。やり投埼玉新人大会3位、関東新人大会第7位　榊原（2年）

●**美術部**　第46回高文祭・美術工芸専門部出展　金井（3年）。第65回県高校美術展　優秀賞・全国大会出展　横山（2年）

●**物理部**　ロボカップジュニア・ジャパンオープン2022出場。第73回県科学教育振興展覧会中央展　優秀賞（以上21頁参照）

●**弓道部**　第66回関東高校弓道大会男子団体優勝（2連覇）浜野、太田、髙河（いずれも3年）。同大会　個人8位　太田（3年）。学校総体県予選男子団体　優勝　浜野、太田、髙河（以上3年）、歌代、木川、金井塚、松本（以上2年）。同大会　個人優勝　太田（3年）、準優勝　浜野（3年）。高校総体団体ベスト16。第24回紫灘旗全国高校遠的大会　団体5位　松本、木川、歌代、金井塚（いずれも2年）。第77回国体関東ブロック少年男子1位、国体出場　太田（3年）、金井塚（2年）。県高校弓道新人戦　男子団体3位　歌代、金井塚、木川（いずれも2年）。全国高校弓道大会出場　松本（2年）

●**古典ギター部**　全国学校ギター合奏コンクール2022　銀賞・審査員特別賞

●**新聞部**　第46回高文祭出場。第67回埼玉県学校新聞コンクール優秀賞

●**庭球部**　高校総体ソフトテニス男子　出場阿部・久保ペア（3年）

●**音楽部**　第65回埼玉合唱コンクール金賞。第77回関東合唱コンクール　金賞。第34回埼玉ヴォーカルアンサンブルコンテスト銀賞

●**生物部**　第73回県科学教育振興展覧会　中央展優良賞　岩田、吉川、小林、丸山、板橋（以上2年）、七戸（1年）

●**地学部**　第14回日本地学オリンピック　全国大会出場（21頁参照）。

●**科学の甲子園**　第12回埼玉県大会　総合2位（21頁参照）

●**吹奏楽部**　県吹奏楽コンクール高校A部門銀賞。県アンサンブルコンテスト　クラリネット3重奏銀賞、打楽器5重奏銀賞

●**英語部**　第61回全国高校英作文コンテスト入賞　金城（3年）、青野（1年）

事務局だより

叙勲・褒章等受賞者（県内）

◆叙勲

令和4年春

旭日小綬章
金子 俊雄（定13）
地方自治功労
元 入間市議会議員

瑞宝中綬章
山野 清二郎（高12）
教育研究功労
埼玉大学名誉教授

令和4年秋

旭日中綬章
藍綬 田中 龍夫（高23）
地方自治功労
元 入間市長

瑞宝小綬章
吉田 幸雄（高17）
警察功労
元 埼玉県警察本部生活安全部長

瑞宝双光章
西澤 泰男（高21）
教育功労
元 公立中学校長

◆褒章

令和4年春

藍綬褒章
橋本 芳博（高19）
社会福祉功績
現 民生・児童委員

（「内閣府ホームページ」より・同窓会事務局調べ）

◆日本医師会赤ひげ大賞（第10回）
鋤柄 稔（高18）
医師

◆大岡信賞（第4回）
野村 喜和夫（高22）
詩人

秋季散策会 2023年度のご案内

東松山初雁会

「比企丘陵の歴史と文化に触れる一日」

●日時
10月29日（日）午前9時

●集合場所
東武東上線高坂駅

●懇親会場
ガーデンホテル紫雲閣
東松山市箭弓町2-5-14
☎：0493-23-5151
午後0時半受付／1時開宴

●懇親会費
7千円（同伴者5千円）

●散策コース 高坂駅→高坂彫刻プロムナード散策→巌殿山正法寺（↓物見山↓）→埼玉ピースミュージアム→懇親会場

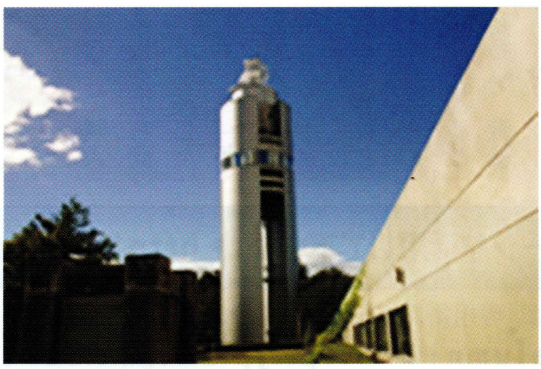
●見どころ
「高坂彫刻プロムナード」
高坂駅西口から西に伸びる道路の歩道両側約1キロメートルにわたり、彫刻家・高田博厚の作品32体が並ぶ野外彫刻ギャラリー。



「巌殿山正法寺」
彫刻の鑑賞の後には、バスにて「巌殿山正法寺」へ。昨年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」で描かれた源頼朝・北条政子・比企能員とも深い関わりがある寺。718（養老2）年開山、坂東札所第十番の名刹（めいさつ）です。



「埼玉ピースミュージアム」
戦争の体験を次の世代に引き継ぎ、県民に戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えることにより、平和に対する意識の高揚を図り、平和な社会の発展に寄与することを目的に、平成5年8月に開館。

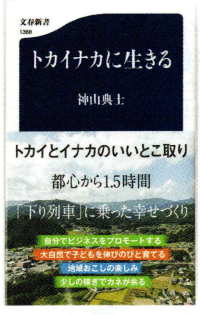


◆寄贈図書

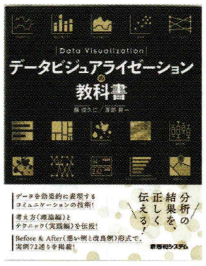
・奥泉 光（高26）・加藤陽子共著
「この国の戦争」



・神山典士（高47）
「トカイナカに生きる」



・渡部良一（高52）・藤俊久仁共著
「データビジュアライゼーションの教科書」



・野村喜和夫（高22）
「シュルレアリスムへの旅」



◆ 総会のご案内 ◆

日　時 5月28日（日）AM9時30分より受付

会　場 ラ・ボア・ラクテ（4階ベガ）
川越市脇田本町22-5　☎049（243）6600

- **総　　会**　AM10時～10時50分
- **記念講演**　AM11時～正午

講師　和田雄二氏（高25）
東京工業大学 特任教授

演題　大学発ベンチャー Start-Upが世界を変える
～1人の研究者が経験している化学産業の一例～



- **懇親会**　PM 0時20分～2時20分（会費 7,000円）

※ 新型コロナウイルスの状況により中止になる場合があります。
中止の場合は、ホームページ（下記）に掲載します。

表紙写真の説明

表紙の写真は、旧制川越中学校時代に購入した「日本文化史」第3巻（太田亮著、大正11年）の内表紙です。ここには「明治文庫」の2種類の印が押されています。

2つのうち左側の丸型の印は、「明治文庫」の両側に「明治神宮御造営記念」と「埼玉県立川越中学校」が記され、明治文庫創設の由来が分かります。これとは別に「大正12年3月24日」に購入したことを記す押印、さらにその右側には「大正12年3月24日」に卒業した「第20回卒業生有志父兄」からの「寄附金」で購入したことを記す押印と記入があります。



戦後、図書室では明治文庫の名称と丸印が使われたのですが、昭和23年の新制高校発足にともない「川越中学校」から「川越高等学校」に変わり、戦後購入の書籍には「川越高等学校」の名称の入った角印が新たに作られました。表紙写真の本はその転換期のもので、戦前からの丸型の押印に加えて、改めて新制高校明治文庫の角印が押されました。



同窓会ホームページを活用して下さい ▶http://alumni.gnk.cc/kawagoe/

同窓会事務局の連絡には、専用電話＆FAX **049（225）9071**
また、メールアドレス **alumni@hb.tp1.jp** をご利用ください。

編集後記

124年の歴史を誇る川越高校。その図書館には、希少・貴重な書籍がたくさん残っています。しかし、その中に「明治文庫」なる蔵書群があることはあまり知られていません。今号では、在庫管理のため年度内に整理されるのを機に蔵書に着目。明治文庫を中心に**特集1**にまとめました。

3年以上にわたるコロナの影響で、地区初雁会など同窓会全般の活動も制限されてきましたが、昨年ごろから再開の動きが。中でもかねてより待望の声が高かった、業種の垣根を越えて情報交換する「くすのき交流会」の発足が決まったことは朗報で、**特集2**にまとめました。

今後も皆さんの声を生かした同窓会報作りに努めていきます。ご意見・ご要望、心からお待ちしています。（大澤）

尾崎勝美（高11）　岡部恒雄（高15）
圓山壽和（高17）　栗原忠男（高20）
栗原由郎（高21）　一瀬　要（高23）
金子保夫（高25）　野口　孝（高25）
大澤　誠（高26）　平野正美（高26）
山本隆浩（高55）